



## 関西医大と 糖尿病の、 戦いは 甘くない

SWEET

FAT

### 巻頭 特集 糖尿病：「糖尿病と関西医大。」

#### ■ 附属病院

新任教授に聞く	入江 潤一郎	07
新任教授に聞く	清水 俊雄	08
新任教授に聞く	嶽北 佳輝	09
新任教授に聞く	内田 克典	10
学長特命教授に聞く	田中 亨	11

#### ■ 総合医療センター

理事長特命教授に聞く	福長 洋介	12
新任センター長に聞く	成子 隆彦	13
新任診療部長に聞く	畔 熱行	14

#### ■ 香里病院

新任センター長に聞く	杉江 知治	15
理事長特任教授に聞く	緒方 奈保子	17

#### ■ くずは病院

病院長に聞く	高山 康夫	18
「地域包括医療病棟」について		
・3B病棟(地域包括医療病棟)管理部長	河田 裕美子	
・3A病棟病棟長(回復期リハビリ病棟)	大隅 由紀子	
・リハビリテーションセンター 副主任	清水 貴史	
・薬剤部	淺川 佐知子	
・栄養部 主任	奥井 潤	
・栄養部 副主任	田中 さやか	
・診療情報分析室	藤岡 みゆき	

#### ■ 天満橋総合クリニック

専門医に聞く	西村 久美子	21
--------	--------	----

#### ■ くずは駅中健康・健診センター

センター長に聞く	浦上 昌也	22
----------	-------	----

#### ■ 関西医科大学附属病院

TEL.072-804-0101(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/hirakata/>  
 〒573-1191 大阪府枚方市新町2-3-1  
 地域医療連携部 病診連携課(地域医療センター事務局)  
 TEL.072-804-2742 FAX.072-804-2861



#### ■ 関西医科大学総合医療センター

TEL.06-6992-1001(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/takii/>  
 〒570-8507 大阪府守口市文園町10-15  
 地域医療連携部 病診連携課  
 TEL.06-6993-9444 FAX.06-6993-9488



#### ■ 関西医科大学香里病院

TEL.072-832-5321(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/kori/>  
 〒572-8551 大阪府寝屋川市香里本通町8-45  
 地域医療連携部 病診連携課  
 TEL.072-832-9977 FAX.072-832-9988



#### ■ 関西医科大学くずは病院

TEL.072-809-0005(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/kuzuha/>  
 〒573-1121 大阪府枚方市楠葉花園町4-1  
 地域医療連携部  
 TEL.072-809-0013 FAX.072-809-0022



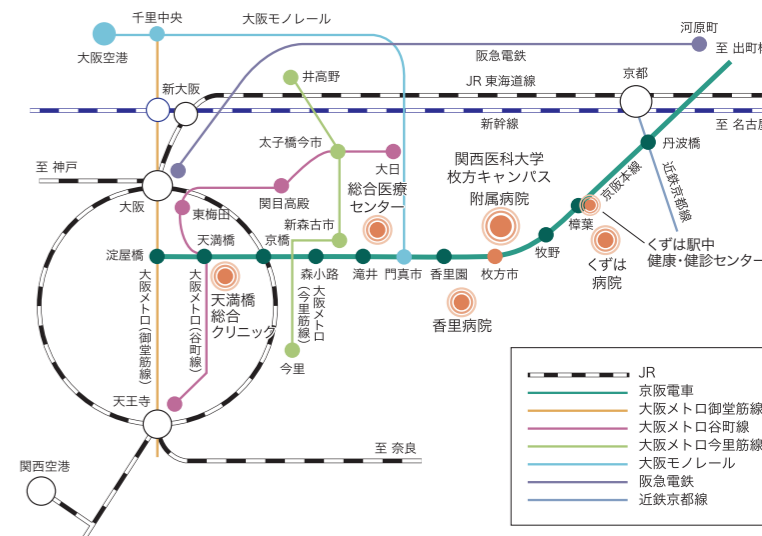
#### ■ 関西医科大学天満橋総合クリニック

TEL.06-6943-2260(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/temmabashi/>  
 〒540-0008 大阪市中央区大手前1-7-31(OMMビル 3階)  
 TEL.06-6943-2260 FAX.06-6943-9827



#### ■ くずは駅中健康・健診センター

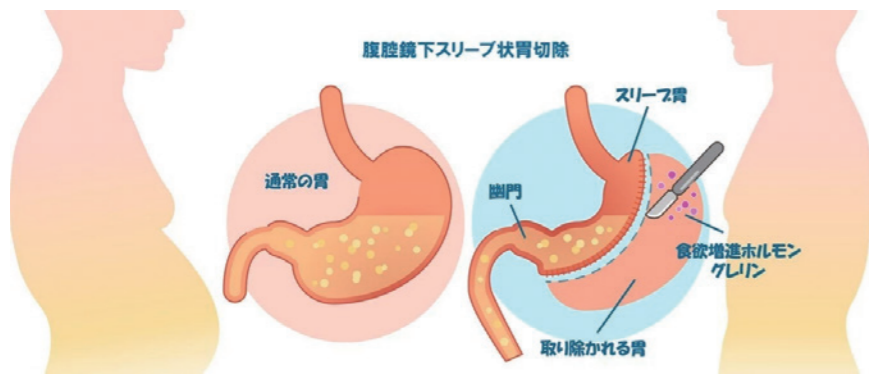
TEL.072-809-2005(代)  
<https://www.kmu.ac.jp/kuzuhaekinaka/>  
 〒573-1121 大阪府枚方市楠葉花園町14-1(京阪くずは駅ビル2階)  
 TEL.072-809-2005





また、糖尿病診療においては、食事の調整と身体活動量の増加が治療戦略の根幹をなす二大方針であり、最も優先される考えです。そのため当センターでは管理栄養士と協働して、実現可能で継続できる栄養処方を行うと同時に、健康科学センターや小児健康・健診センターの利用を推進し、専門的な運動プログラムの導入へ誘導しています。さらに肥満症を合併した症例には健康科学センターと連携し、患者一人ひとりに合わせたオーダーメイドの運動療法を提供しています。

糖尿病は、「治癒」という表現が用いられない疾患です。一度血糖管理が適切に行われたとしても、生活



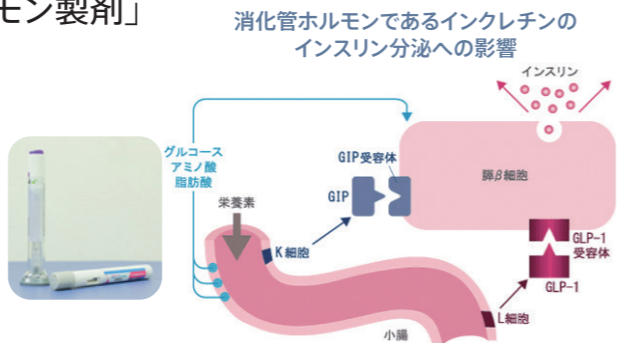
P.7にセンター長の入江診療教授インタビュー記事を掲載中!!

リズムやライフステージの変化によって再び血糖値が上昇することも往々にして起こってしまうためです。だからこそ、糖尿病に対しては当院のような大学病院が病態評価、治療の方向性を検討・策定し、一定の治療を行った後は地域の先生方とシームレスに連携し、病連携・病診連携のもと医療介入を継続することが重要です。糖尿病予備軍や発症した患者はもちろん、一旦血糖管理が安定した方であっても再度管理が困難になった場合も、お気軽に当センターへご紹介ください。再評価を経て、新たな治療戦略を提案できるように尽力いたします。

### 糖尿病との戦いに、新たなる武器「腸管ホルモン製剤」

本学は以前から糖尿病に対して減量代謝改善手術を行っており、劇的な改善をもたらしてきました。その効果がなぜ生まれるかを検証する中で、にわかに脚光を浴びたのが腸管ホルモン「インクレチン」の存在です。インクレチンが膵β細胞に働きかけ、インスリンが分泌されるメカニズムが解明された結果、治療薬として実用化に至りました。代表的な腸管ホルモンとしてGIPとGLP-1が知られており、DPP-4阻害薬やGLP-1受容体作動薬として臨床応用されています。

この薬剤は、これまでの糖尿病治療薬の最大の副作用である低血糖、ならびに体脂肪蓄積(=肥満)を助長せずに血糖マネジメントを可能とする点がメリット。逆に食欲の低下や消化管症状(嘔気、腹部膨満感など)、体重減少による骨格筋量の減少が懸念されます。それゆえ、腸管ホルモン製剤による治療は経験豊富な専門医の支援が不可欠で、ウゴビー®のように、知見を蓄積した医療機関での実施が重要です。



## 関西医科大学 附属病院

附属病院では、2024年4月に「糖尿病センター」を立ち上げ、センター長に入江診療教授を招聘。複数診療科の専門医や看護師だけでなく、薬剤師、管理栄養士、理学療法士からなるチームで多角的に診療と治療を提供する体制が整い、従来から取り組んでいた糖尿病診療をさらに充実、発展させました。診療科だけでも8つにわたるため、センターには20名を超えるメンバーが所属しています。

糖尿病センターの大きな特徴は、近年糖尿病診療のメインストリームを占めている腸管ホルモン製剤と、本学がこれまで積み上げてきた減量代謝改善手術療法のノウハウ、さらに入江センター長が得意と

する腸内環境を応用した治療法を融合し、新しい治療戦略の提案を目指している点にあります。

もちろん三大合併症にも対応。神経障害には脳神経内科・外科、網膜症には眼科、腎症には腎臓内科や腎センターと、それぞれの分野におけるプロが診療科・部署の垣根を超えて密接に連携しています。これらの症状は初期段階において自覚症状が極めて乏しいことが知られていますが、当センターでは症状出現前に専門医の診療を受けることが可能です。他にも、皮膚・血管・循環器がん、睡眠時無呼吸、認知症など周辺症状の治療でも、センターの枠組みを活かして各科と連携して診療にあたっています。

「糖尿病センター」を中心に、新しい武器で糖尿病と戦う。

# 特集 糖尿病と 関西医大

日本人男性の約5人に1人、女性でも約10人に1人が罹患しているといわれる糖尿病(2022年「国民健康・栄養調査」厚生労働省)。その可能性を否定できない予備軍まで含めると、患者数は2,000万人にも及ぶと言われております。ご存知の通り糖尿病は神経障害や網膜症、腎症と様々な病変の原因となり、皮膚・血管・心疾患に悪影響を及ぼすばかりか、骨粗鬆症やがん、認知症リスクも高めてしまう重大な疾患です。また、大阪府の調査で外来患者数が増加傾向にある一方で、糖尿病診療は症状緩和から合併症治療といった医療的な取り組みだけでなく、生活習慣の改善によるそもそもの発症予防・合併症の防止が必要となり、チーム医療がより一層求められる領域でもあります。

そうした領域において、関西医大はどのように糖尿病と戦っているのか。今回の「つなぐ+believe」では、本学の医師やコメディカル、附属医療機関が一体となって、最新の医学的知見に基づき取り組んでいる、甘くない「戦い」をご紹介します。

関西医大の糖尿病との戦いは、甘くない



関西医科大学  
香里病院



関西医科大学  
総合医療  
センター

延べ2,000人超の実績。  
職種横断のチーム医療で、  
糖尿病と戦う。

総合医療センターでは2012年に「糖尿病腎症予防外来」を設置し、これまで2,000人を超える患者を診療してきました。中でも糖尿病診療の中心を担う内分泌代謝内科では、糖尿病診断から外来治療、教育入院、合併症管理まで幅広く対応しています。また、後述の多職種連携型の糖尿病診療チームが、患者一人一人にきめ細やかな診療を実践。循環器内科や腎臓内科とも連携し、糖尿病に合併しやすい虚血性心疾患や腎不全の治療もスムーズに提供する体制を整えています。

院内に設置された糖尿病診療チームは、内分泌代謝内科医師を中心に糖尿病療養指導士資格を有する看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、健康運動指導士、事務職員からなる多職種連携チームで、それぞれが有機的に連携しながらきめ細やかに対応。他にも看護ケア外来では、フットケアや自己注射指導を実施。自身の病気と向き合い、自分の身体を自らがマネージメントするという意識付けを行っています。

さらに、糖尿病の診療には「予防」が不可欠、との考えのもと一般市民を対象とした糖尿病啓発活動「世界糖尿病デーフェスタ」を毎年開催。今年は「糖尿病と災害」をテーマに、地震や台風などの災害時への備えについて講演した他、運動実演や資料の展示、血糖測定、インスリン注射の模擬体験など、様々な角度から啓発を行いました。

4/1 tue.  
新OPEN  
糖尿病センター開設!!  
豊田長興医師が着任!!

地域の信頼と専門性で、糖尿病と戦う。

香里病院では、多職種が連携した包括的なチーム医療を実践しており、糖尿病患者さんが安心して治療を受けられる環境を提供しています。地域の病院やクリニックとの連携を大切にしながら、患者さん一人一人に合わせた診療と生活習慣改善のサポートを通じて、糖尿病治療と合併症の予防に注力しています。

糖尿病性腎症の重症化予防・透析回避にも力を注いでおり、糖尿病透析予防外来において糖尿病療養指導士（CDE）、慢性疾患看護認定看護師、管理栄養士、健康運動指導士などの専門資格を持つスタッフが、患者さんに合わせた個別指導や生活習慣

改善プランを提供しています。病状が進行した糖尿病性腎症4期の患者さんには、透析スタッフが腎代替療法や透析生活についても説明し、患者さんの気持ちに寄り添ったきめ細かい指導を心がけています。香里病院は「地域の糖尿病診療のハブ」として、地域の病院やクリニックのニーズに応えながら、紹介された患者さんには最適な医療を提供するよう努めています。さらに治療後も患者さんが地域の医療機関で継続的なケアを受けられるよう、密接な連携体制を構築し、地域全体で糖尿病患者さんを支える環境づくりに貢献してまいります。



## インタビュー特集

# KEY-PERSONに聞く。

関西医大グループの各附属医療機関で診療の最前線に立つ医療従事者から、新任主任教授・診療部長・診療科長を中心にKEY-PERSON＝カギを握る人物をピックアップ。現在取り組んでいることや得意な治療・領域、これからの展望など、語ってもらいました。

### ■ 附属病院

糖尿病科 診療教授  
新薬開発科 診療科長・教授 国際がん新薬開発センター センター長  
精神神経科 診療教授  
病理診断科 診療教授  
病理診断科 学長特命教授

入江 潤一郎  
清水 俊雄  
嶽北 佳輝  
内田 克典  
田中 亨

### ■ 総合医療センター

下部消化管外科学講座 理事長特命教授  
心臓血管病センター センター長  
形成外科 診療部長

福長 洋介  
成子 隆彦  
畔 熱行

### ■ 香里病院

化学療法センター センター長  
眼科 理事長特任教授

杉江 知治  
緒方 奈保子

### ■ くずは病院

病院長  
3B病棟(地域包括医療病棟)管理師長 河田 裕美子  
3A病棟師長(回復期リハビリ病棟) 大隅 由紀子  
リハビリテーションセンター 副主任 清水 貴史  
薬剤部 浅川 佐知子

高山 康夫  
奥井 潤  
田中 さやか  
藤岡 みゆき

### ■ 天満橋総合クリニック

内科

西村 久美子

### ■ くずは駅中健康・健診センター

くずは駅中健康・健診センター センター長

浦上 昌也

## 関西医科大学

# くずは 病院



グループ病院と  
職種の垣根を超えて、  
糖尿病と戦う。

くずは病院では、関西医大附属病院・総合医療センター・香里病院所属の医師が外来を担当することで、大学病院クオリティの糖尿病診療を手軽に受けていただける体制を整えています。また、日本糖尿病療養指導士資格を持つ看護師・管理栄養士が勤務している他、大阪糖尿病療養指導士資格を持つ看護師も勤務。看護・栄養の両面からプロフェッショナルが糖尿病診療をサポートしています。

また、運動習慣のサポートが必要な患者には、病院内に併設されている「関医トレーニングスタジオ」の活用を推奨し、患者の筋肉量や運動習慣のある／なしに合わせて始めやすく続けやすい運動プログラムを指導。糖尿病予防指導も実施しており、医師・看護師・管理栄養士・その他コンディカールが連携することで、病院の垣根・職種の垣根を超えて、患者に最適な糖尿病診療を提供しています。



## 関西医科大学 天満橋 総合クリニック

健診×診療で、予備軍から  
幅広くカバーして  
糖尿病と戦う。

天満橋総合クリニックでは所属する糖尿病専門医が、健康診断を受検しに來られた方に対して治療の概要や治療計画 考えられる合併症などを早期にアドバイスできることから、早期に治療への動機づけが可能となるのがメリットです。また、治療開始後の患者に対しては診察時に体重測定を行って結果を踏まえた生活環境の変化を確認。公私にわたる悩み事に耳を傾けて患者との信頼関係を構築することで、本質的な糖尿病診療を目指しています。他にも、毎年夏には患者全員にフットケアを指導。リフレを使用している方には身体貼付のお手伝いだけでなく、看護師がデータを生活イベントとの照らし合わせて解析し、より実生活に沿った血糖値の把握を実現しています。

もちろん関西医大グループ力として本学附属医療機関での教育入院を勧めることもありますが、基本は治療の自己中断をいかにして防ぐか。患者の生活背景にマッチした病医院をご紹介していますので、地域の先生方のお力添えをいただきながら最適な糖尿病診療を提供しています。



New Professor Interview

# 糖尿病科 新任教授に聞く

関西医科大学附属病院  
糖尿病科 診療教授

## 入江 潤一郎

Irie Junichiro



糖尿病ではなく、人を診る。  
それが最良の  
糖尿病診療へ続く道

2024年4月付けで関西医科大学医学部第二内科学講座 附属病院糖尿病科担当診療教授、並びに糖尿病センターセンター長を拝命いたしました。糖尿病は、数多の臓器に影響を与える疾患です。そのため複数の診療科とタイトに連携できる体制が必要となるため、眼科、腎臓内科、循環器内科、血管外科、上部消化管外科、皮膚科、耳鼻科などの複数診療科からなる糖尿病センターを構築しました。この枠組みを活用して、網膜症、腎症、末梢神経障害、血管病変など多くの合併症の予防・早期発見に注力しています。診療科横断的な枠組みであるのが当センターの強みです。また、糖尿病と同じように様々な疾患の原因となる肥満症に対しても、腸管ホルモン製剤や減量代謝改善手術など、腸管の機能を応用した新しい治療の開発にも取り組んでおります。これも診療科を横断し、また多職種連携によって実現しえたものです。詳しくは巻頭特集もぜひご覧ください。

私は糖尿病治療の目標として、血糖値を下げることにばかり注目しないよう注意をしています。患者さんの血糖が上がったのはどのような原因があるのか、食事の偏りがあるのであればなぜそのようなようになったのか、身体活動量が減少したのであればなぜ減じたのか、などをまず考えます。これらの情報を得ずに薬物による治療を開始しても、一時的には血糖値が下がっても、その後、再度血糖マネジメントが困難になることがよく経験されるからです。また糖尿病治療では、その方らしい生活を維持することも大切です。血糖値や体重などの数字にとらわれ過ぎたり、生活の質がひどく損

なわれたりするようなことを避けなければいけません。つまり、血糖値や合併症の評価だけでなく、患者さんの生活習慣や心理状態、社会的背景まで、あらゆる角度から病態と患者さんを理解し、治療戦略を組み立てる必要があります。しかし、このように多角的で重層的な分析を、一つの医療機関だけで日々の外来診療において実践するのはハードルが高いかと思えます。そこで、我々大学病院が、初期急性期の病態、病期の精緻な評価と治療構築を担い、治療方針がおおよそ固まり、状態が安定した時点でその後の診療を地域の先生に引き継いでいただくことが、シームレスで安心な患者さんの診療と治療に重要だと考えています。その後、再度、病態に変化が生じた場合は、また我々が拝見する、という診療のループを構築して、地域医療に貢献していきたいと思っております。今後の病診・病病連携のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

## Profile

- 1996年4月 慶應義塾大学病院 内科 研修医
- 1998年5月 埼玉社会保険病院 内科 医員
- 1999年6月 国家公務員共済組合連合会 立川共済病院 内科 医員
- 2000年4月 慶應義塾大学医学部 内科(腎臓内分泌代謝) 助手
- 2003年7月 米国ピッツバーグ大学医学部 臨床免疫学講座 研究員
- 2006年4月 北里研究所病院 糖尿病センター 副センター長
- 2007年10月 慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 助教
- 2013年10月 慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 専任講師
- 2021年6月 慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 准教授
- 2024年4月 関西医科大学 第二内科 糖尿病科 診療担当教授

New Professor Interview

# 国際がん新薬 開発センター 新任教授に聞く

関西医科大学附属病院  
新薬開発科 診療科長・教授  
国際がん新薬開発センター センター長

## 清水 俊雄

Shimizu Toshio



## 大学病院では国内初の「がん新薬治療に特化した」専門診療科 がん新薬へのアクセスを、最短・最速で患者へつなぐため

令和6年11月1日付で、附属病院新薬開発科診療科長・国際がん新薬開発センター長に就任致しました。大学病院では国内初の「がん新薬治療に特化した」診療科 部門です。現在、国内ではがん新薬治療(Phase 1)実施施設が東京中心の一部の高度医療機関に限定されており、西日本では初めてとなる存在ですが、日本におけるがん医療分野のドラッグロスやドラッグラグを解消すべく、海外でしか開発されていないがん新薬を日本でいち早く患者さんに提供し、(二)でも多くの治療オプションを、用意できるアジアの治療拠点として革新的アクセス向上を目指しています。私たちの主なミッションは、がん新薬の早期開発(おもに第1相試験)促進であり、新薬開発科の診療専門外来および診療入院病床を擁します。さまざまな癌種のがん患者さんが治療に参加できるよう、専任医師に加えて更に複数の診療科から治療分担医師が参画する体制を立ち上げ、がん新薬を治療薬として世界で初めて当院で使用できる体制を構築しました。標準的な治療を受けた後に病状が増悪した進行がんや、適切な治療法が確立されていない(または存在しない)進行がんの患者さんを対象に、未承認のがん新薬を用いた治療を試みています。治験候補となる患者さんを紹介いただくには地域医療機関との緊密な連携が重要かつ必要不可欠です。そのため現在は、特に化学療法等のがん治療を行っておられる医療機関の先生方への情報提供に注力しています。ご要望

があれば喜んで直接ご説明に伺わせて頂きますので、ぜひ一度ご相談ください。標準治療が無効となった進行がん患者さんでも適格性を満たせば、治療の可能性が残されていますのでお気軽にご紹介下さいますと幸いです。本学は2028年に創立100周年を迎えます。私たち国際がん新薬開発センター！新薬開発科はがん患者に有効ながん新薬をいち早く届けることを目指すと同時に、アジアにおけるがん新薬開発の国際ハブ拠点「Five Stars” Oncology Early Phase 1 Center of Excellence」を、目指して鋭意精進します。今後とも引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## Profile

- 1999年3月 近畿大学医学部 卒業
- 2002年6月 国立がんセンター中央病院 内科レジデント(新薬治療開発)
- 2005年4月 近畿大学医学部 内科学講座 腫瘍内科 助教
- 2010年1月 米国テキサス大学オースティン校薬学部 薬物療法部 研究員  
米国START (South Texas Accelerated Research Therapeutics) Phase 1 Center San Antonio TX, USA クリニカルフェロー
- 2012年4月 近畿大学医学部 内科学講座 腫瘍内科 講師
- 2016年4月 国立がん研究センター中央病院 先端医療科 医長  
先端医療開発センター 新薬臨床開発分野 併任  
企画戦略局 国際戦略室 併任 / 国際開発部門アジア連携推進室 併任
- 2022年4月 和歌山県立医科大学内科学第三講座(呼吸器内科・腫瘍内科)准教授
- 2022年11月 和歌山県立医科大学 病院教授
- 2024年11月 関西医科大学附属病院 新薬開発科 教授・診療科長  
国際がん新薬開発センター センター長



New Professor Interview

精神神経科  
新任教授に聞く

関西医科大学附属病院  
精神神経科 診療教授

嶽北 佳輝

Takekita Yoshiteru

一人ひとりが生きやすい社会を目指して、あらゆるアプローチを

附属病院精神神経科講座診療教授に就任いたしました、嶽北佳輝と申します。専門は難治性の精神疾患で、これまで多くの患者さんやご家族・医療スタッフとの関わりを通じ、「心」と「脳」をめぐる多様な問題に向き合ってきました。そもそも、私は精神科医になりたくて医学部を目指し、医師となったからは会話を通じた治療や生物学的治療、社会的環境調整の重要性を知り、精神神経科学の中でも臨床精神薬理学、ニューロモデュレーションなどの分野に注力してきました。その経験を活かし、言葉だけでなく薬剤、電気、磁気などあらゆる治療法でアプローチしています。

特に最近増えているのは「周産期」認知症」中でも周産期の精神症状には、産科専門医と毎週カンファレンスを行って情報を共有し、先手先手の対応を実現しています。また、抗アミロイド抗体薬の実用化によって脚光を浴びる認知症に対して、附属病院では脳神経内科と協働して認知症予防センターを立ち上げました。抗アミロイド抗体薬はMCI（軽度認知障害）と初期のアルツハイマー病が適応となりますが、外来にいられた患者さんを初見で判断するのは非常に難しい。そのため、健康診断でのスクリーニングや些細な変化に気づける家族の違和感が重要と考えており、ご家族からいつもと違う言動を指摘された場合は、ぜひ一度ご紹介ください。

当科は入院病床を持っていません。それだけ

に、他科や地域の先生方との連携を重要視しています。他の病気で入院中に精神疾患を発症された方や、精神疾患を元々持たれている方が体の病気で入院された場合のコンサルテーション・リエソンを積極的に行っています。精神疾患による入院は本学総合医療センターだけでなく近隣に精神科病床を持つ病院と密接に連携し、適切にバトンタッチしています。今後は既存診療の質向上だけでなく、外来でのニューロモデュレーションの導入を推進したいと考えています。診療科として最善の医療を提供することを第一に、スタッフ一同が科学的根拠に基づく治療を実践し、フルラインナップの精神医療を提供する大学病院として、地域医療の核となる診療科を目指して日々精進していきますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

Profile

- 2003年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 2003年5月 関西医科大学 精神神経科学教室 入局
- 2007年6月 仁康会小泉病院 医員
- 2011年4月 関西医科大学 精神神経科学教室 助教
- 2014年4月 ポローニャ大学生物医学/神経運動科学教室 postdoctoral fellow researcher
- 2016年4月 関西医科大学 精神神経科学教室 助教
- 2017年4月 関西医科大学 精神神経科学教室 講師
- 2020年4月 関西医科大学総合医療センター 精神神経科 病院准教授
- 2021年4月 関西医科大学医学部 精神神経科学講座 准教授
- 2023年10月 関西医科大学附属病院 精神神経科 科長
- 2024年4月 関西医科大学医学部 精神神経科学講座 診療教授



New Professor Interview

病理診断科  
新任教授に聞く

関西医科大学附属病院  
病理診断科 診療教授

内田 克典

Uchida Katsunori

病理診断と臨床の文法で、  
予後予測と治療選択を的確に、迅速に。

2024年2月1日付で、関西医科大学医学部病理学講座附属病院病理診断科診療教授を拝命いたしました。専門は診断病理学、特に泌尿器領域/胆膵領域です。私はもともと腎泌尿器外科の臨床医として医師のキャリアをスタートさせましたが、10年を過ぎる頃検査の魅力に取りつかれ、思い切って腫瘍病理学の道を選び直しました。一人の医師としてどれだけ多くの患者を治療できるかと考えたとき、病理医はより多くの患者の助けになれるのではないかと思っただけのも転科の理由です。でも、だからこそ臨床医で得られた経験を活かせる病理医として、日々患者さんと直接対する先生方の立場や想い、ニーズに沿った形で、臨床の文法に則って、診断結果をお戻りするよう心がけています。

「何の疾患か」が答えとして求められてきました。が、私はできるだけ予後や治療選択につながる顕微鏡的所見を的確に、迅速に提供するよう努めています。例えば大血管に近い膵臓の癌で、腫瘍が膵表面からどのぐらいの深さにあるか。これまでのデータから、表面の2mm以内にある場合は全例死亡しているのですが、3mm以上では生存例もある。将来的には病理所見によって癌を中止して別の治療を選ぶことになるかもしれません。このように病理診断は臨床医のニーズに応える、その先に、患者をいち早く最適な治療選択に至らせ、結果として治療成績の向上に患者の利益につながると考えています。

当院の病理診断科には多種多様な領域の病理専門医が在籍しており、精度の高い病理診断を提供しています。また、他医療機関で作製診断された標本の再評価も行いますし、講演等を通じて最新の診断病理学の普及に努めています。地域の先生方におかれましては、ぜひお気軽に診断や講演登壇をご依頼ください。一方で、これからの病理診断はどうあるべきか。次世代の育成も私の使命です。若手病理医を育成するため、当院での直接指導だけでなく全国各地の病理医がつながるWebサイト「PathPort」どこでも病理ラボの幹事として、運営に携わっています。ご興味をお持ちの先生は、ぜひアクセスしてみてください。

Profile

- 1994年3月 三重大学医学部 卒業
- 1994年5月 三重大学附属病院 泌尿器科
- 1996年4月 山田赤十字病院(現伊勢赤十字病院) 泌尿器科 医員
- 1999年4月 社会保険四日市病院(現四日市羽津医療センター) 泌尿器科 医員
- 2000年8月 Washington University, Renal Division
- 2002年9月 三重大学附属病院 泌尿器科 助手
- 2004年4月 三重大学 腫瘍病理学(中央材料部) 助教
- 2011年8月 Johns Hopkins Hospital, Surgical Pathology
- 2011年12月 三重大学 腫瘍病理学(中央材料部) 助教
- 2021年8月 三重大学附属病院 病理部 講師
- 2024年2月 関西医科大学 病理学講座 診療教授



New Professor Interview

## 下部消化管外科 新任教授に聞く

関西医科大学総合医療センター  
下部消化管外科 部長  
理事長特命教授

**福長 洋介**

Fukunaga Yosuke

**低侵襲な手術と集学的治療で、  
決してあきらめない治療を実践。  
下部消化管外科を強化します**



このたび下部消化管外科部長として就任いたしました福長です。大腸外科を専門にもち、特に大腸がんに対する低侵襲手術と集学的治療を駆使した治療を得意としております。ご存じのように、大腸がんは手術で7〜8割の人が治癒を目指す比較的予後の良い病気です。早期発見では90%以上が治癒しますし、進行がんでも5年生存率は70〜80%。これが私の治療意欲をかりたせる原動力であり、1990年代後半から国内で普及し始めた腹腔鏡下手術にいち早く取り組み、これまで3千例以上の手術を行ってまいりました。近年注目を集めるロボット支援下手術にも積極的にかわり、特に低位の直腸がん手術にはそのメリットが大きいと感じております。直腸がんの治療では肛門温存手術（人工肛門にならない手術）も積極的に取り組んでおり、特に進行した直腸がんには、近年目覚ましい進歩を遂げている抗がん剤治療や放射線治療を組み合わせた集学的治療を行いながら予後の改善を目指します。中にはこれらの術前治療でがんが見えなくなる症例もあり、手術をせず経過をみる治療法(Watch and Wait療法)も提案することも。これはがんの根治のみならず究極の肛門温存治療といえます。診療においては

### Profile

- 1987年3月 大阪市立大学(現・大阪公立大学)医学部医学科 卒業
- 1987年6月 大阪市立大学医学部 第2外科 研修医
- 1989年4月 大阪市立大学大学院 医学研究科 入学
- 1993年4月 英・マンチェスター大学ホープ病院 リサーチフェロー
- 1994年4月 大阪市立総合医療センター 消化器外科 研究医
- 2003年4月 大阪市立総合医療センター 消化器外科 副部長
- 2008年4月 大阪市立十三市民病院外科 副部長
- 2009年4月 社会福祉法人生長会 ヘルランド総合病院 内視鏡外科 部長
- 2010年4月 がん研有明病院 消化器外科 医長
- 2014年4月 がん研有明病院 消化器外科 下部消化管担当 副部長
- 2015年4月 がん研有明病院 消化器外科 大腸外科 副部長
- 2018年7月 がん研有明病院 消化器センター長
- 2019年8月 がん研有明病院 大腸外科 部長
- 2024年7月 関西医科大学総合医療センター 下部消化管外科講座 理事長特命教授



New Professor Interview

## 病理診断科 新任教授に聞く

関西医科大学附属病院  
病理診断科 学長特命教授

**田中 亨**

Tanaka Akira

永年、大学附属病院において人体病理学や病理診断に携わり、臨床各科と直に接してきた経験を活かして、2024年4月1日付で附属病院病理診断科学長特命教授を拝命しました。病理医と言われると病理切片と始終向き合っているイメージをお持ちの先生もおられるかも知れませんが、私は常にその背景にいる患者を意識し、臨床の先生が最良の治療選択へ最速で到達できるように適切な最初の一步を踏み出せるよう注意しています。また、臨床医の鑑別だけでなく画像診断や様々な検査結果を組み合わせ、それぞれの強みを活かした分析と判断(アナライシス)から解決策(ソリューション)の提案を行うよう意識しています。

前任地では臨床医と病理医が症例について検討するCJC(Clinico-pathological Conference:臨床病理検討会)を多数経験し、剖検例の病理所見と臨床所見との関連について、臨床病理双方の立場から意見を交換して詳細な病態や死因の解明を重ねました。その結果診療レベルが向上しただけでなく、臨床の先生方が知りたいことは何か、どんな情報提供があれば良いのか、多くのことを学びました。その一方で病理の有用性を知っていただき、病理医は臨床現場と相対するものではなく同じ方向を見て二人三脚で歩む存在であることを理解してもらった良い機会にもなりました。だからこそ、地域の皆さんとの連携を促進し、病理診断までも包含した顔の見える関係を構築していきたいと考え

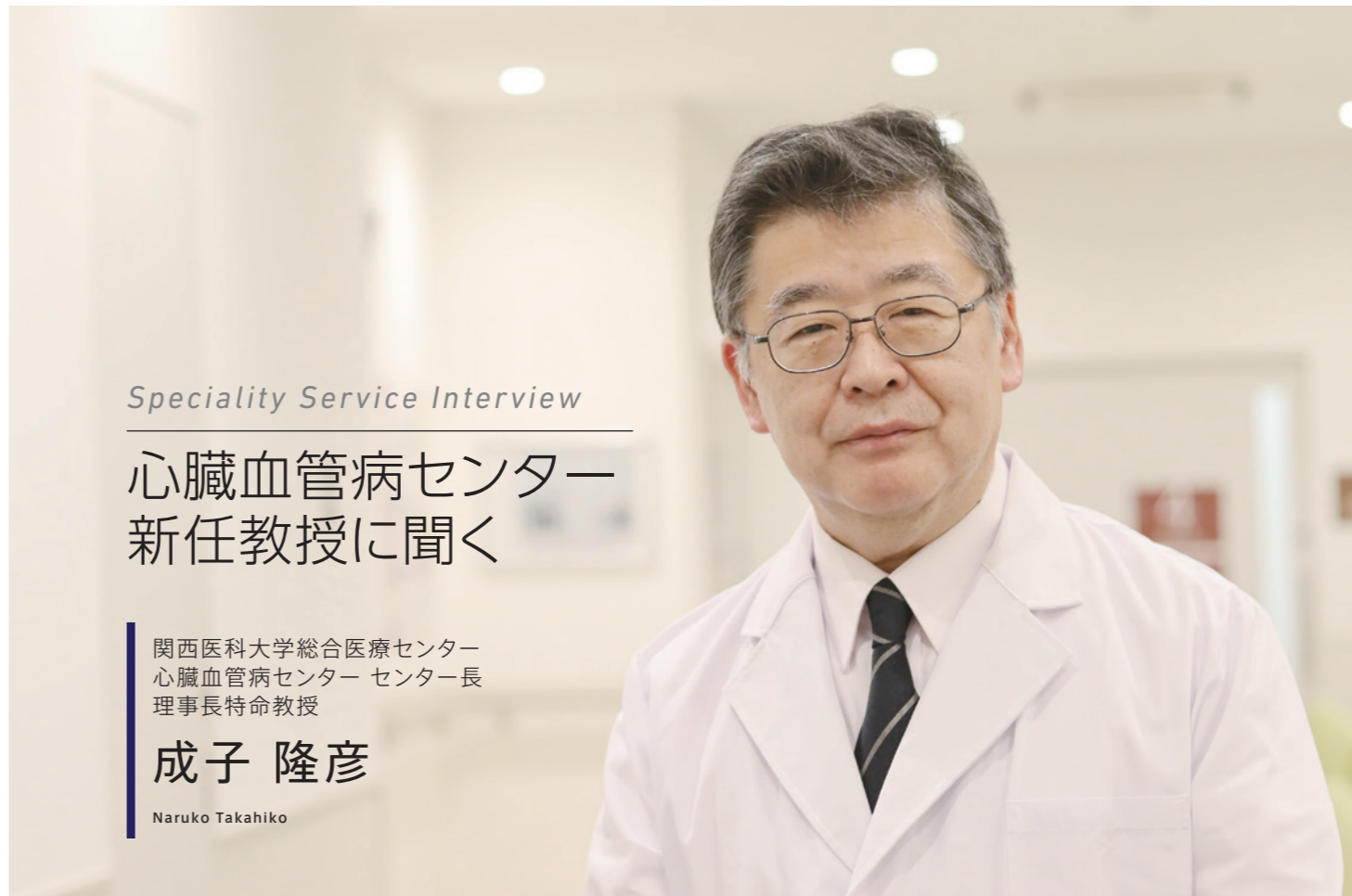
**時代の転換点を  
ファシリテーションしていく病理を、北河内に**

### Profile

- 1983年3月 信州大学医学部 卒業
- 1983年6月 都立駒込病院 病理科
- 1987年4月 大阪大学大学院 医学研究科  
博士課程 病理学 専攻
- 1991年3月 大阪大学大学院 医学研究科  
博士課程 病理学 修了(医学博士)
- 1991年5月 大阪大学附属病院 医員
- 1994年4月 鹿児島大学医学部 病理学第一講座 助手
- 1996年6月 自治医科大学病理学講座 講師
- 2002年5月 自治医科大学病理学講座 人体病理学部門 教授
- 2024年4月 関西医科大学病理学講座 学長特命教授

ます。さらに将来的には、当院病理診断科のスタッフが近隣の医療機関において病理診断を担当していくような体制も念頭において、関係を発展させていきたいと願っております。

最後に、当院病理診断科は総合的な病理診断力を背景にスタッフ各自が得意な臓器の腫瘍病理を深めて診断を行っている点特徴であり、強みです。その強みを活かしながらさらに一步踏み込む気概や情熱を若い病理医には持つて欲しい。例えば、発生学の最新の知見を活かして腫瘍の構造を見直すなど、最新の基礎研究にも関心を持つて欲しい。さらに、腫瘍だけではなく、炎症性疾患、循環器疾患、神経変性疾患などについても、基礎医学の発展を取り込んだ総合的な視野で体系化を再構築してもらいたい。私としても、新たな領域にチャレンジする病理医がのびのびと育っていく環境をしっかりと整えていくつもりです。



Speciality Service Interview

心臓血管病センター  
新任教授に聞く

関西医科大学総合医療センター  
心臓血管病センター センター長  
理事長特命教授

成子 隆彦

Naruko Takahiko

循環器内科と心臓血管外科とのシームレスな  
連携を強みに、最新の医療技術を身近にご提供します

2024年4月1日付けで心臓血管病センター センター長を拝命しました。成子と申します。これまで循環器内科を専門に、主にカテーテル治療に携わってきました。

近年、循環器内科診療は大きく様変わりしています。以前は心臓カテーテル治療が中心でしたが、不整脈に対するアブレーション治療、弁膜症など外科でしか治療しえなかった心疾患にもカテーテル治療が開始され、心臓血管外科との連携がさらに重要になってきました。当センターでも内科と外科のシームレスな連携により、昨年はカテーテル治療を下肢治療を含め332件、アブレーション治療は170件実施。適宜ハートチームをつくり、低侵襲な手術の選択肢も含めて患者さんに最善の治療を提供しております。

センター長としての信条は「問口は広く、敷居は低く」です。当センターは先端的な治療を積極的に導入しており、カテーテル治療に関しては従来普及しているステント治療に加え、高度石灰化病変に対するRotablatorやOAS (Orbital atherectomy system) の切削を伴う治療法、また高周波で石灰化部分を破碎するIVL (衝撃血管内碎石術) という新しい治療法を提供しています。加えて、近年話題の微小血管狭心症に関しても検査環境を整えており診断・治療が可能です。さらに本年より、心房細動に対する新たなアブレーション治療(パルスフィールドアブレーション)を導入予定で、従

来以上に低侵襲かつ合併症リスクの低い治療が可能となります。今後も最新の医療技術を地域の皆さんに提供すべく、尽力してまいりますのでご期待ください。また着任後、顔の見える地域連携を実現したく地域連携の会を立ち上げました。年数回のペースで「滝井ハートミーティング」をするほか、当センターと不整脈治療センターによる情報誌「ハートレター」も定期刊行しております。当院の医師の紹介や、どのような治療を実施しているかを詳しくお伝えしていますので、お手元に届きましたらぜひご覧いただけますと幸いです。

Profile

- 1985年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1985年4月 大阪市立大学(現・大阪公立大学) 医学部 第一内科 研修医
- 1988年4月 多根総合病院 内科 医員
- 1990年4月 ツカザキ記念病院 循環器内科 部長
- 1994年4月 アムステルダム大学(オランダ) 心臓病理学教室 研究員
- 1996年4月 大阪市立総合医療センター 循環器内科 医長
- 2009年4月 大阪市立総合医療センター 循環器内科 部長
- 2014年4月 大阪市立総合医療センター 循環器センター長(兼任)
- 2022年4月 大阪公立大学大学院 循環器内科学 臨床教授
- 2023年4月 大阪市立総合医療センター 副院長(兼任)
- 2024年4月 関西医科大学総合医療センター 心臓血管病センター長、理事長特命教授



Doctor Interview

形成外科  
診療部長に聞く

関西医科大学総合医療センター  
形成外科 部長  
講師

畔 熱行

Kuro Atsuyuki



一般外来から救急外傷まで幅広く対応。  
ご相談も気軽に声がけください

2024年4月より診療部長を務めております。これまでも関西医科大学系列病院で勤務してまいりましたので、地域の先生方にはご紹介や病診連携を通じて大変お世話になっております。このたび、改めてご挨拶申し上げます。

私が特に得意とするのはマイクロナサージャリーを使った手術で、切断指や手の外科、顔面再建、眼瞼下垂、乳房再建などに主に外傷腫瘍切除後の再建を専門としています。外傷を中心に受け入れるきっかけになったのが、産生会今川病院形成外科への赴任です。当時、切断指をはじめとする外傷受け入れに関して、関西でも屈指の数を誇っていた今川病院で研鑽を積みたいと希望して赴任し、昼夜を問わず緊急性の高い症例に関わることで専門性を磨くことができました。

現在、当科では診療において幅広い疾患の受け入れを重視しており、中でも切断指再接着など救急外傷は夜間休日なども対応。また救命救急センターと協力し、小児の受け入れも積極的に実施しています。日頃、地域の先生方からはけがやできものなどで困りの症例をご紹介いただく機会が多く、大切な患者さんをお任せいただきありがとうございます。形成外科では皮膚腫瘍、眼瞼下垂、褥瘡、皮膚潰瘍の疾患のほか、義眼床再建、顔面神経麻痺、乳房再建、悪性腫瘍術後再建なども治療を行っています。特に通常の治療を1カ月以上行っても治らないような傷(難治性皮膚潰瘍)についても原因に応じてさまざまな治療でアプローチする環境を整えてお

り、当院で原因を突き止め、傷の治り具合を見ながら日頃の通院はかかりつけ医の先生方のもとで……といった診療も可能です。幅広い患者さんのお役に立ちたいと考えておりますので、ちょっとした傷や傷跡、できものなど美容系の相談も含め、お困りのことがございましたら気軽に声がけくださいと幸いです。医療機関の皆さまとの継続的な関係をさらに強固にするべく、診療部長として努めてまいりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

Profile

- 2003年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 2003年6月 関西医科大学附属病院(現・総合医療センター) 研修医
- 2005年5月 関西医科大学附属病院 形成外科 研究医員、葛西形成外科 医員
- 2006年1月 関西医科大学附属枚方病院(現・附属病院) 形成外科 専修医
- 2006年4月 関西医科大学附属枚方病院 形成外科 研究医員、市立岸和田市民病院形成外科 嘱託医
- 2007年4月 産生会今川病院 形成外科 医員
- 2008年4月 関西医科大学附属滝井病院(現・総合医療センター) 形成外科 病院助教
- 2010年7月 関西医科大学附属滝井病院 形成外科 助教
- 2014年10月 関西医科大学附属枚方病院 形成外科 助教
- 2017年4月 関西医科大学総合医療センター 形成外科 助教
- 2020年12月 関西医科大学総合医療センター 形成外科 診療講師
- 2024年4月 関西医科大学総合医療センター 形成外科 講師、診療部長

2024年  
4月  
スタート!



## 香里病院 化学療法センター

### 患者さんへのフォロー体制を強化

当センターは、患者さんがもつ治療への不安や生活上の悩みなどに寄り添い、治療を継続しながらでも、これまでと変わりのない生活を送れるように努めています。ハイブリッドセンターなどの化学療法に対して待ち時間が長いイメージを持たれている方も多いかと思いますが、当センターは薬剤点滴室としてリクライニングチェア8台、ベッド2台の計10床で治療を行っています。このコンパクトさを生かし、機動性の高い運営、かつ患者さんひとりひとりに寄り添う治療の提供を目指しています。

そのひとつとして取り組みを始めているのが、AYA世代と呼ばれる若い世代の患者さんに向けたフォロー体制の構築です。当院でできることとして、がんで仕事を失わないようにサポートする就労支援そして風貌をケアするアヒアランスケアの展開を予定しています。

### Speciality Service Interview

## 化学療法センター センター長に聞く

関西医科大学香里病院  
化学療法センター センター長

### 杉江 知治

Sugie Tomoharu



### 副作用を防ぐ薬薬連携の取り組み

もう一つ、抗がん薬の副作用対策の大きな手として稼働を始めたのが、病院と近隣の調剤薬局との連携です。これまではがん治療を実施しても、各患者さんの副作用の把握は不十分でした。その理由が、副作用は24時間以内に出る場合もあれば72時間以内のこともあり、場合によっては治療1週間後の発現もあり得るという事実です。遅延性の場合、患者さんの不調の訴えは、患者さん側からの発信がない限り医師が把握することは困難でした。

しかし今回スタートした取り組みは、薬局薬剤師さんが調剤翌日に患者さんへ直接連絡を取り、自宅での状態を聞き取って、情報を当院の病院薬剤師にフォローアップシートで報告場合によっては処方提案をしていただく仕組みになっています。この連携によって、主治医は次の受診時までに患者さんの状態を把握し、早期に副作用対策を講じることができ、患者さんにはより安心して受診いただける環境が強化できると確信しています。

化学療法センターの開設により、各診療科での患者さんの受け入れ体制も強化できていますので、地域の先生方におかれましては安心して患者さんをご紹介いただければと思います。

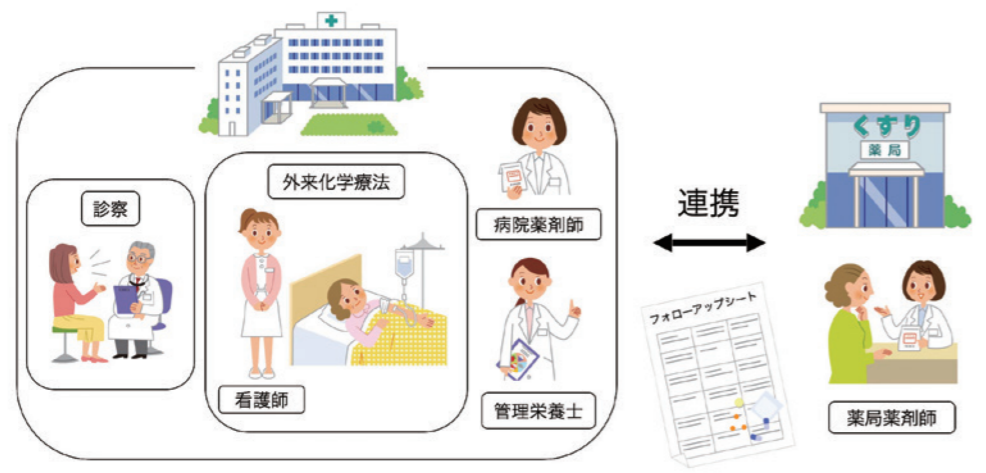
### 抗がん薬の副作用対策をはじめ、 当院がん患者さんへのより良いケアを追求します

昨2024年4月に化学療法センターのセンター長に着任しました杉江です。このたびは崎病院長の指揮のもと、着任と同時に化学療法センターを開設しました。香里病院では従来も化学療法を実施しており、1カ月のべ100名程の患者さんが通院されていますが、これまで診療科を超えてマネジメントする組織がありませんでした。今回のセンター化にあたり、よりスムーズな化学療法の実施はもちろん、医療スタッフの横の繋がりを強化してまいります。

特に注力していきたいのが副作用対策です。がん薬物療法の進歩はめざましく、これまで治療が困難とされていたがんの治療も可能となりました。しかし数々の新薬が登場する一方で、治療内容は複雑化し副作用も多くなっています。現在の化学療法は、患者さんの個性に合わせて治療強度を維持しつつ、副作用を極力最小限に抑えることが求められますが、そのためには診療科単独ではなく横断的に、外来で実施する化学療法の内容を把握し、適切な副作用対策を講じる必要が出てきました。

当センターでは主に乳がん・大腸がん・泌尿器がんについて、医師のみならず、がん化学療法看護認定看護師を含む看護師、薬剤師、管理栄養士ら多職種がチームを組み、専門性を生かして外来化学療法の運営にあたっています。また化学療法を安全に行うためには、患者さん個々の状態を把握することも副作用の予

### 薬薬連携の取り組み



化学療法センター

### Profile

- 1987年3月 京都大学医学部 卒業
- 1987年6月 京都大学医学部附属病院 研修医
- 1988年4月 大阪府済生会野江病院 医師
- 1990年9月 兵庫県立塚口病院 医師
- 1997年1月 京都大学大学院 医学研究科 博士課程 修了
- 1997年4月 米・スタンフォード大学 医学部 研究員
- 2001年1月 京都大学大学院 医学研究科 腫瘍外科 助手
- 2001年9月 滋賀県立成人病センター 外科医長
- 2003年4月 京都警察病院 外科 医員
- 2008年1月 京都大学大学院 医学研究科 乳腺外科 助教
- 2009年5月 京都大学大学院 医学研究科 乳腺外科 准教授
- 2013年4月 関西医科大学附属病院 乳腺外科 教授
- 2024年4月 関西医科大学香里病院 化学療法センター センター長

防も必要です。たとえば治療前に口内スクリーニングを行い、肺炎球菌ワクチン、インフルエンザワクチン、带状疱疹ワクチンの接種を積極的に行うことで、免疫低下にもなる感染症の予防が期待されますので、当センターではこれらの実施を推奨しています。患者さん個々の状態を把握することも副作用の予防も必要です。たとえば治療前に口内スクリーニングを行い、肺炎球菌ワクチン、インフルエンザワクチン、带状疱疹ワクチンの接種を積極的に行うことで、免疫低下にもなる感染症の予防が期待されますので、当センターではこれらの実施を推奨しています。

Speciality Service

病院長に聞く

関西医科大学くずは病院  
病院長

高山 康夫

Takayama Yasuo



くずは病院では従来、一般病棟・地域包括ケア病棟42床と回復期リハビリテーション病棟52床を運営してまいりましたが、2024年10月から一般病棟・地域包括ケア病棟を地域包括医療病棟に転換し新体制をスタートさせました。地域包括医療病棟とは、年々増加する高齢者の救急搬送に対応するため、2024年度の診療報酬改定で新設された病棟です。これまで当院では、地域の方々の健康寿命延伸を目指す病院として整形外科を中心に内科と連携したケア体制を強化するとともに、骨折など多くの救急症例を受け入れ、毎月約70件の手術を行いながら、リハビリ体制の強化も図ってきました。今回新設された地域包括医療病棟は高齢者の救急受け入れと機能回復に焦点を当てており、当院が目指す「急性期医療から運動機能・生活機能を落とすことなく自宅に帰っていただく」という運営方針にマッチすると考え、急性期病床および地域包括ケア病床を地域包括医療病棟に変更しました。

実は現状、地域包括医療病棟を運営する条件は非常に厳しいといわれております。それは救急医療体制、平均在院日数、在宅復帰率、入院症例のADL維持・向上など施設要件に関するさまざまなハードルがあるためですが、当院では多職種の強固な連携によりこの基準をクリアすることができました。医師、看護師、管理栄養士、理学療法士、薬剤師、事務のスペシャリストなど多職種が集い、意見を交わしながら

Profile

- 1982年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1982年5月 関西医科大学附属病院 研修医
- 1984年6月 田附興風会北野病院 内科 医員
- 1985年6月 関西医科大学附属病院 研究医員
- 1990年1月 関西医科大学 内科学第二講座 助手
- 1992年11月 米・カリフォルニア大学サンディエゴ校 Cardiology, Research Fellow
- 1999年5月 関西医科大学 内科学第二講座 講師
- 2001年6月 関西医科大学 内科学第二講座 助教授
- 2010年6月 関西医科大学香里病院 病院長
- 2018年4月 関西医科大学 医学部 理事長特命教授
- 2020年4月 関西医科大学くずは病院 病院長

当院の強みを生かしつつ地域・時代のニーズに応える、「地域包括医療病棟」を新設しました

らスムーズな運営を実現しています。救急受け入れを増やすにあたり、どうしても搬送されてきた患者さんが想定外に重症だったり、多疾患併存によるハイリスクだったりというケースも増えてきておりますが、その点に関する対応強化にも励んでおり、引き続き品質の向上に努めていきます。地域のクリニックの先生方も高齢の通院患者さんが多いかと存じます。高齢者の場合、緊急ではあるものの重症度はそれほど高くないために、どこに入院治療を依頼するべきかお悩みのケースもあるのではないのでしょうか。そういう場合には、いちど当院にお声がけください。

くずは病院は、今後も地域の健康寿命延伸に貢献すべく、地域の医療ニーズに適切に応える病院でありたいと考えておりますので、これからも皆様からのご意見を大切にしてまいります。

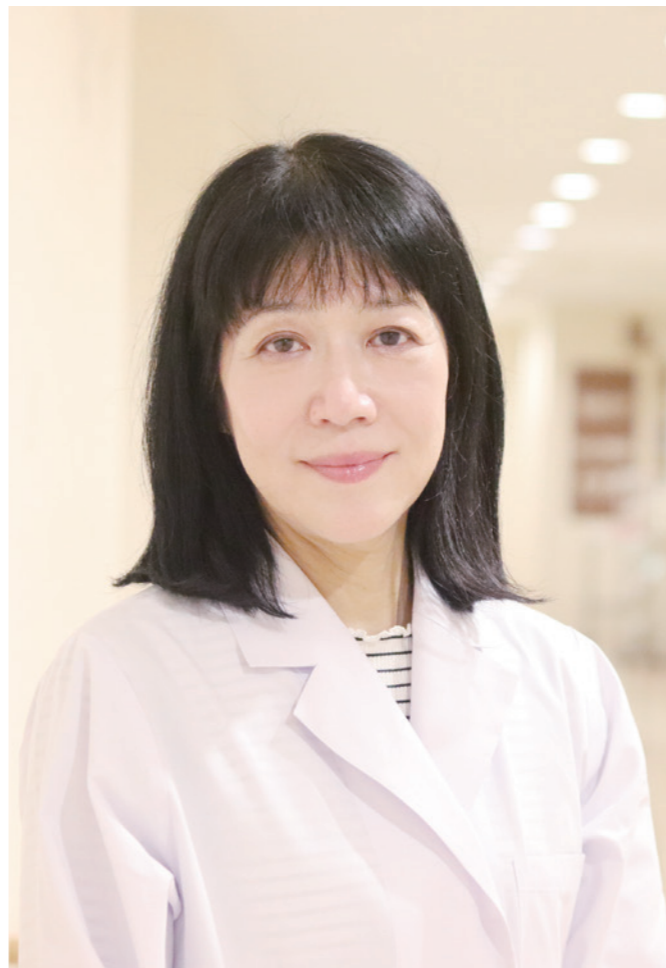
New Professor Interview

眼科  
新任教授に聞く

関西医科大学香里病院  
眼科  
理事長特任教授

緒方 奈保子

Ogata Nahoko



昨年6月、理事長特任教授を拝命し香里病院に着任しました。専門領域は目の奥、網膜硝子体といわれる分野です。外科的治療への興味と目の組織の美しさに惹かれたことから眼科医となつて以来、これまで臨床と研究どちらも意欲的に取り組んでまいりました。診療にあたっては患者さんの気持ちに寄りそつ丁寧な対応を心がけており、ご紹介いただいた患者さんは、当院での治療後にはできる限り地域の先生方のもとへお帰りいただいております。

高齢化社会となつて久しく、今や白内障は高齢者のコモディティズといえますが、私は前職

手術を要する目の病気について従来以上の幅広い疾患への対応が可能になりました

時代に行った調査において「白内障の手術を受けた人は認知症になりにくい」ことを明らかにしました。視力改善によるQOL向上の要因を省いても有意なデータが出ており、白内障術後は目の中に届く光、特にブルーライトが多く入ることなどで生体リズムが改善するためであると考えられ、人によっては不眠症状が改善することもあります。また、2010年代後半にアメリカで実施された約150万人を対象とした調査では、白内障手術を受けて視力が改善した人の方が手術を受けていない人よりも長生きするというデータが出ています。近年、社会における認知症予防への関心が高まる一方で、白内障治療は認知症予防、高齢者の健康維持への有効な一手といえますので、少しでも白内障の症状が出ている方には積極的な受診をお勧めしています。

また直近のトピックスとして、現在、香里病院眼科では従来よりも幅広い疾患への対応が可能になっております。たとえば糖尿病網膜症や網膜静脈閉塞症など眼底出血を起こすような疾患、網膜剥離など緊急手術を要する疾患にも対応できるようになりました。該当する患者さんがいらっしゃるいましたらぜひお声がけください。

今後は後進の育成にも励みつつ、地域に根ざした香里病院の眼科として近隣の皆さまの健康に寄与していきたいと思っております。地域の先生方とは勉強会などを機会に、ぜひ顔の見える交流ができればと願っておりますので、引き続きよろしくお願いたします。

香里病院 眼科では、幅広い疾患への外科治療が可能になりました

- 糖尿病網膜症
- 加齢黄斑変性
- 網膜静脈閉塞症
- 網膜剥離
- 黄斑円孔
- 網膜前膜

など

これらの病気の患者さんがいらっしゃいましたらご連絡ください。

Profile

- 1983年3月 関西医科大学医学部 卒業
- 1983年5月 関西医科大学 眼科学教室 入局
- 1984年4月 関西医科大学大学院 医学研究科 博士課程 入学
- 1988年3月 関西医科大学大学院 単位修得
- 1988年4月 関西医科大学 眼科学教室 助手
- 1991年2月 南フロリダ大学 留学 (research associate)
- 1994年4月 関西医科大学 眼科学教室 講師
- 2003年7月 関西医科大学 眼科学教室 助教授
- 2007年4月 関西医科大学 眼科学教室 准教授
- 2010年7月 関西医科大学香里病院 病院教授、眼科部長
- 2010年9月 奈良県立医科大学 眼科学 主任教授
- 2024年3月 奈良県立医科大学 名誉教授
- 2024年6月 関西医科大学香里病院 眼科 理事長特任教授

## 地域包括医療病棟(42床)の運用をスタートしました



関西医科大学くずは病院では、2024年10月より地域包括医療病棟を創設し、地域包括医療病棟42床・回復期リハビリテーション病棟52床で運営しております。多職種連携により安定した稼働を目指す地域包括医療病棟のスタッフをご紹介します。

### 地域包括医療病棟とは

2024年度の診療報酬改定により新設された病棟です。年々増えつつある高齢者の救急搬送において、多くを占める軽症・中等症の患者さんの受け入れ先となるのが想定されています。入院期間はおよそ21日以内。早期からリハビリテーション・栄養管理・服薬管理・退院支援といった包括的なサポートを行うことで、ADLの低下を防ぎ、無理なく日常に戻っていただく役割を担います。くずは病院では、主に整形外科・内科領域を担当しています。



関西医科大学くずは病院  
リハビリテーションセンター 副主任  
理学療法士  
認定理学療法士(運動器・疼痛管理)

### 清水 貴史

Shimizu Takashi

### 早期介入によりADLの低下を防ぎます

ご高齢患者さんの入院時の懸念として、急性期の治療を終えてからリハビリを開始した場合に身体機能の回復が遅れてしまうことが挙げられます。しかしその点、地域包括医療病棟では入院後早期にADLや栄養状態を評価し、医師を中心に多職種がチームとなって患者さんの退院、退院後までのサポート計画を立てます。加えて定期的なカンファレンスを実施しており、患者さん一人ひとりにきめ細やかな対応ができています。理学療法士としてやりがいを感じるのは、急性期からの介入により、より効率的に身体機能の低下を防ぎ、ADLの維持・向上を目指す点です。これからも常に新しい知見を吸収しながら、より良いサポートを提供できるよう尽力していきます。

### 入れ替わりが早いからこそ細やかさを意識したケアを

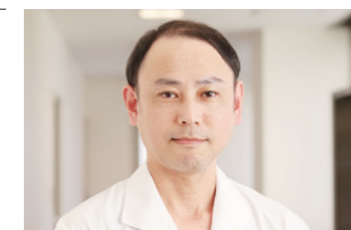
地域包括医療病棟専任の管理栄養士を務めています。この病棟では入院後早期に患者さんの状態を評価する必要があります。早期から食事の調整ができることが従来の急性期病棟や一般病棟と異なる点です。患者さんの入れ替わりも激しく、だからこそ密なコミュニケーションが重要だと実感しています。時間が許す限り患者さんの元へ足を運び、ミールラウンド(食事観察)や聞き取りを行い、食欲低下や食事に課題があれば看護師や薬剤師、リハビリスタッフと情報共有し、医師の指示の下、食事の調整やフォローを実施。入院中の栄養管理から退院に向けた指導まで、適切なタイミングで患者さんと接することができるよう努力しています。今後も職種の連携や協力体制を高めて、活動の質と幅の向上を目指していきます。



関西医科大学くずは病院  
栄養部 副主任  
管理栄養士

### 田中 さやか

Tanaka Sayaka



関西医科大学くずは病院  
栄養部 主任 管理栄養士  
NST専門療法士  
病態栄養専門管理栄養士  
日本糖尿病療養指導士

### 奥井 潤

Okui Jun

### 早期な栄養管理体制で、サポートします

当病棟では管理栄養士2名で担当し、入院後すぐに栄養評価を行う必要性があるため、迅速な対応が求められます。早期に管理栄養士が介入し、多職種と連携することにより、患者さん一人ひとりに寄り添った栄養サポートを行うことが、当病棟において大きな意義があると考えています。当院への救急搬送は整形外科領域が多く、経口摂取が可能で栄養状態が比較的保たれている患者さんが大部分を占めますが、中には内科疾患や内科的合併症による低栄養状態、低栄養リスクの方もいらっしゃいます。栄養管理を必要とする方を取り漏らすことがないように、担当しているNST(栄養サポートチーム)の連携により、多角的なアプローチを実現していきます。



関西医科大学くずは病院  
回復期リハビリ病棟 病棟師長  
看護師

### 大隅 由紀子

Osumi Yukiko

### 密な情報共有によりスムーズな病床調整に努めます

回復期リハビリテーション病棟の病棟師長として地域包括医療病棟との病床調整を担当し、あわせて地域医療連携部の一員として当院全体の転院調整も兼任しています。地域包括医療病棟の運営における特に重要な課題は、平均在院日数21日以内という入院期間制限の中での救急受け入れ数と病床管理の両立であり、河田管理師長とは常に情報を共有し、回復期リハビリテーション病棟での受け入れも含め迅速な調整に努めています。病床調整をスムーズに行うことで、患者さんが安心して過ごせる環境・体制の構築に貢献できることがやりがいです。また回復期リハビリテーション病棟では、地域包括医療病棟との連携がスタートしたことにより業務の幅が広がった点でハードな部分もありますが、スタッフ一丸となって病院全体の機能が向上するよう尽力しています。

### 常時3名の薬剤師が病棟を担当。かかりつけのように寄り添います

当院では入院から退院まで同じ薬剤師が一貫して患者さんを担当する方針で、かかりつけ薬剤師のようなかたちで患者さんとの信頼関係構築に努めています。現在、地域包括医療病棟では薬剤師5名でシフトを組み、常時3名が病棟を担当する体制を維持しています。当病棟は高齢者も多く、持参薬のある方が多い一方で意思疎通が難しい人もいるため、患者さんの状態に応じた服薬管理の工夫をしています。ご家族やスタッフとの連携を大切に、退院後もご自身で服薬管理ができるよう支援しています。病棟再編による患者数の増加に伴い、服薬指導件数も増えました。より多くの患者さんとの接点が増え、取り組み甲斐のある日々を過ごしています。



関西医科大学くずは病院  
診療情報分析室 主任  
診療情報管理士

### 藤岡 みゆき

Fujioka Miyuki

### 関連スタッフの意識改革により円滑な病床転換が叶いました

診療情報管理士は診療情報を収集・管理・分析し、時には病院の経営方針に関するデータを扱う専門職です。このたびの病棟転換では、施設要件達成に向けた院内スタッフへの情報提供や呼びかけ、データ管理による数値モニタリングを担いました。厳しい条件が多く大変な面もありましたが、医師、看護師、コメディカル、事務職員が協力し、10月より無事移行が実現できたことを大変嬉しく思います。高齢者の救急受け入れ実績、リハビリに強い体制、さらに管理栄養士がいるという点で、地域包括医療病棟という新たな病棟は当院が担うべき役割であると確信しています。今後、国が施設要件をどのように変更するかに注目しつつ、引き続き病棟が円滑に運営できるよう、院内に向けて細やかな情報発信に努めます。



関西医科大学くずは病院  
地域包括医療病棟 管理師長  
看護師

### 河田 裕美子

Kawata Yumiko

ご自宅に安心して帰れるようチーム体制でサポートします

地域包括医療病棟の施設要件は細かく規定されており、運営上の大きな課題は病床コントロールです。特に回復期リハビリテーション病床との連携が欠かせず、病床管理を担当していただいている大隅師長の活躍に助けられてきました。病床転換から約4カ月経った今、順調なスタートが切れたことにホッとしています。当院は以前より高山病院長の指示の下、リハビリテーションに力を入れてきました。その強みを平均在院日数21日以内の地域包括医療病棟で生かすべく力を入れていくのが、患者さんをチームで診ること、入院前支援の充実です。現状、当病棟の患者さんの約半数が予定入院です。入院前から退院時・退院後の生活のイメージを共有することで、患者さんにもご家族にも安心して過ごしていただけるよう努力しています。

